

〈資料〉

経済学史研究会の第250回記念例会と その歩みについて

On the 250th Anniversary Meeting of the KG Society for the History of Economic Thought and the History of this Society

原 田 哲 史

The 250th Anniversary Meeting of the KG Society for the History of Economic Thought was held December 7, 2019 at our Library Hall. This Society had started in 1982, but was originated from “Prof. Hori’s Research Meeting” founded in 1946. So we can count meetings of the Society as over 650 times from the original foundation.

Tetsushi Harada

JEL : B10, B20, B30

キーワード：経済学史研究会、経済学史、堀研究会、堀経夫

Keywords : History of Economic Thought, Tsuneo Hori, kgshet

目次

1. 経済学史研究会第250回記念例会
2. 前身の堀研究会から数えて第653回
3. 第201回から第250回までの記録

1. 経済学史研究会第 250 回記念例会

本学経済学部の大義での経済学史分野（経済学史・社会思想史・近代経済学史ならびに経済思想史・経済哲学）の担当教員——現在は原田哲史・久保真・本郷亮——は 1982 年から 35 年以上にわたって広域的な参加者を含む「経済学史研究会」を本学で催し続けており、2019 年の 12 月例会（12 月 7 日（土））はその第 250 回記念例会となった。この研究会は、前身である故堀経夫教授（1896～1981 年）¹⁾ による「堀研究会」（1946 年～81 年）の 403 回を合わせると実に 70 余年にわたって 650 回を超えて開催されており、この領域におけるわが国で最も伝統のある研究会である²⁾。

図書館ホールで催されたこの記念例会では、経済学における経済学史研究の意味に関する記念報告を、わが国とヨーロッパにおけるこの分野の功労者に依頼した。竹本洋氏（本学名誉教授、日本学士院賞受賞者）による「テキストと読解——「歴史器官」としての経済学史・社会思想史」と、ベルトラム・シェフォルト氏（ドイツ・フランクフルト大学上級教授、トーマス・グッゲンハイム経済思想史賞受賞者）による“The Significance of Economic Knowledge for Development in History”（歴史に見る発展のための経済的学識の意義）である。それぞれに竹澤祐丈氏（京都大学准教授）と中井大介氏（近畿大学教授）がコメンテーターとして口火を切ったあと、活発な討論が展開された。

夕刻の関学会館「レストランポプラ」での祝宴では、かつて世話人として 30 年余りにわたって研究会を牽引された篠原久氏（本学名誉教授、「アダム・スミスの会」会長）によって、研究会の歩みについて記念スピーチがなされた。それに続いて、八木紀一郎氏（京都大学名誉教授）、有江大介氏（横浜国立大学名誉教授）、有賀裕二氏（中央大学教授）、渡辺邦博氏（奈良学園大学名誉教授）、小峯敦氏（龍谷大学教授）、上宮智之氏（大阪経済大学准教授）その他によって、祝辞や思い出が述べられた。また故堀経夫の孫娘で本学職員の山本由

1) 1955～66 年に本学学長、1958～68 年に経済学史学会代表幹事、1966～69 年に四国学院大学学長、1966 年から日本学士院会員。堀経夫の略歴については、田中敏弘（1991）、141-143 頁参照。

2) この専門領域のメインの学会である経済学史学会の創立が 1950 年なので、それよりも長く続いている。<http://jshet.net/about/intro/>参照。

起子氏の挨拶が場内を沸かせた³⁾。

2. 前身の堀研究会から数えて第 653 回

上に「堀研究会」(1946 年～81 年)の 403 回と書いたが⁴⁾、それはどのようにカウントできるであろうか。それは以下のように確認することができるであり、それとともに末尾の「表 1：堀研究会の回数と頻度の多い報告者」を作成した。

その 1：1946 年 7 月 27 日の第 1 回から 1973 年 5 月 27 日の第 319 回まで

堀研究会の記録は、1946 年 7 月 27 日の 1 回めから 1973 年 5 月 27 日の例会までの記録が堀経夫博士喜寿記念事業委員会編『経済学の研究と教育の五十年』(1973 年)に「堀研究会 [堀経夫先生宅]」として示されている⁵⁾。回数は記されていないので、それをひとつひとつ——ただし日付だけで報告者名もテーマも書かれていないものは入れずに⁶⁾——数えていくと、1973 年 5 月 27 日の例会が第 319 回であることが分かる。

その 2：1973 年 7 月 1 日の第 320 回から 1981 年 3 月 22 日の第 403 回まで

1973 年 7 月 1 日の 320 回めから 1981 年の 3 月 22 日の第 403 回例会までについては、田中敏弘氏(本学名誉教授)による「経済学史研究会記録補遺」(2011 年)に記されているが、これは 1975 年 1 月 26 日の第 337 回から 1977 年 12 月 18 日の第 369 回までを欠いている(理由は不明)。これらをすべて含むのは当時の世話人張光夫氏と篠原久氏によって書かれた記録ノート(篠原氏

3) 記念例会の様子は、下記の関西学院大学のウェブサイトを示されている。

https://research-activity.kwansei.ac.jp/topic/index.php?c=topics_view&pk=1583921703

4) 篠原氏の記念スピーチでは「402 回」と述べられたが、その後筆者が同氏から教示を得つつ厳密に数え直したところ、次に述べるように 403 回であった。

5) 記念事業委員会編(1973)、747-768 頁。この記録は、田中(2010)に書き写されているが、残念ながら 1 か所(1947 年 2 月 23 日の例会)の年月日の書き落としがあるので、1 回分少ないかのような印象を与える(田中(2010)、10 頁; 記念事業委員会編(1973)、747 頁参照)。

6) 1948 年の 9 月 26 日、10 月 15 日、11 月 14 日がそれぞれである(田中(2010)、11 頁; 記念事業委員会編(1973)、749 頁参照)。また、堀氏が四国学院大学で催した 1967～69 年の研究会(田中(2010)、24-25 頁; 記念事業委員会編(1973)、767-768 頁参照)もカウントしていない。

が保持)であって、本稿では後者でもってあらためてカウントした。

以上その 1・その 2 を通して全体を見て(表 1 から)分かることは、最初の 10 年ほどは(1956 年まで)年に約 15~20 回も開催されており、1 年に複数回報告する参加者が多かったことである。参加人数は明らかではないが、特定の参加者らが密に行っていた研究会であったと考えられる。その後 1957 年から 81 年の最終回(第 403 回)までは年約 10 回程度の開催である。

この転換の理由は定かではないが、1951 年に堀経夫編で 750 ページほどある『経済思想史辞典』(創元社)が出版されていることからすれば、それまではその共同執筆を意識して行われた研究会として密であったのではないかと思われる。1947 年 11 月 23 日(第 23 回)の例会では、久保芳和・西村孝夫両氏の報告でテーマが「『経済思想史辞典』担当部分の執筆プランの発表」となっているし、48 年 1 月 18 日の三谷友吉氏の報告テーマも「執筆プラン発表」⁷⁾となっている。また堀は『経済思想史辞典』の「序文」で「相当長い年月に互る月二回の会合」⁸⁾としてこの堀研究会について言及している。

『辞典』刊行後もしばらくは同じペースで続けていこうとしたとしても、次第にそれに無理を感じて、57 年頃からは年 10 回ほどに減らしたのではなかろうか。あるいは、1955 年から堀が(10 年余りにわたり!)学長であったこと、58 年からは(これも 10 年間)経済学史学会の代表幹事になったことから、本人の多忙さゆえ、以前ほど頻繁に開けなかったこともあるであろう。

以上のように、堀研究会は変化しながらも 403 回続くのであり、それに加えて経済学史研究会の 250 回をカウントすると、後者は実に 2019 年 12 月に 653 回めを迎えたことになるのである。

3. 第 201 回から第 250 回までの記録

堀の死去(81 年 9 月 18 日)によって堀研究会が第 403 回(1981 年 3 月 22 日)の例会までで終止するとともに、それを継承して経済学史研究会として新たに展開していったプロセスについては、すでに田中敏弘氏によって詳説され

7) 田中(2010)、11 頁;記念事業委員会編(1973)、748 頁参照。

8) 堀経夫編(1951)、3 頁。

ているので⁹⁾、ここではとくに述べない。また経済学史研究会の第 1 回（1982 年 1 月）例会から第 200 回例会（2009 年 12 月）までの報告者とそのテーマについても田中氏によって示されているので¹⁰⁾、そちらを見ていただきたい。

ここでは、それ以降の傾向と、また 2013 年 3 月から世話人が篠原久氏から原田に交代したことにもなう変化について述べるとともに、末尾の「表 2：経済学史研究会の第 201 回例会から第 250 回例会まで（2010 年 3 月～2019 年 12 月）の記録」（回（年月）・報告者・論題）でもって、資料としてのこの論稿を閉めたい。

経済学史研究会の発足から足かけ 30 余年にわたり（途中留学期での代役はあったとはいえ）世話人を務めてきた篠原氏¹¹⁾ から原田へのその交代は、篠原氏の定年退職（2013 年 3 月末）にともなうものであった。とすれば 2013 年の 4 月からの交代になりそうなものであるが、それが同年 3 月の第 219 回例会でもってなされたのは、同時に退職する篠原氏と竹本洋氏の両者を記念して、原田が両者が報告者の記念例会を大きめの教室で開催すべく組織したからである¹²⁾。つまり、自ら祝われる例会に世話人であるわけにはいかないという篠原氏の意向により、第 219 回例会から原田が世話人を務めるようになった（事務局は本郷亮、ただし 2020 年 3 月まで。また、2016 年度は原田の留学のため久保真が世話人代理）。

少しさかのぼるが、201 回めに踏み出した 2010 年 3 月頃（篠原世話人期の最後の 3 年間ほど）には、本研究会も、この分野の他の諸研究会と同様、毎回の例会について経済学史学会や社会思想史学会のメーリングリストによってアナウンスし、広く出席を呼びかけることがすでに慣習となっていた。そのため、会員と会員外をもはや厳密に区別することが難しくなってきた。また夏合宿の宿を確保しそれを実施するのが、大学院生・研究員の減少とも相まってしだいに厳しくなってきた。このような状況において、2013 年の 3 月例会

9) 田中（2010）、4、26-27 頁参照。

10) 田中（2010）、28-37 頁参照。

11) 田中（2010）、4 頁参照。

12) なお 2015 年 3 月に井上琢智氏が退職するに際して世話人の原田がその記念例会の開催を提案したが、井上氏が辞退したため行われなかった。

での世話人の交代を契機に徐々に研究会の実施形態が整理・見直されていき、その結果、それ以前と比べて、次のような現在の実施形態へと移行した。

- (1) 会員・非会員の区別はもはや行わず、定着して出席される方々を歓迎するとしても、本研究会のサイトや学会メーリングリストとでのアナウンスを見てその都度参加される方々を例外とは見なさない。
- (2) それにともなって年会費は、自らを常連と意識する方々と会の運営に寄与したいと考える方々とに自主的に、年度初めに 1,000 円を納入していただく。
- (3) アナウンスを的確にするため、毎回の例会の最後に次の例会のプログラムを披露するとともに、可及的速やかにそのプログラムを研究会サイト¹³⁾と学会メーリングリストに提示する。
- (4) 例会の開催は原則として毎年度 4 月・7 月・10 月・12 月の 4 回とし(特別な場合は追加的に 3 月にも開催、また合宿は行わない)、回数を増やすことよりも毎回の例会の中身を充実するように努める。
- (5) 例会の内容を充実するために、原則として毎回 2 ラウンドの報告を行うことにし、また各報告に予定討論者をあらかじめ設定して(アナウンス段階でそれも提示)、討論が迅速かつ深いものになるように努める。
- (6) 海外の研究会で常識となっているように、懇親会は報告者への慰労の意を含むものとし、報告者からは懇親会費をとらない。

以上である。

13) <http://tetsushi-harada.com/kgshet/>

表 1：堀研究会の回数と頻度の多い報告者

回	年	開催回数 頻度の多い報告者（1年間に2回以上報告した者、括弧内は報告回数。別の者と一緒に2人で報告した場合もカウントした。同じ回数の者は50音順にならべた）
第1回～第4回	1946年（昭和21年）7月27日（記録上の初回）から	なし
第5回～第24回	1947年（昭和22年）	川村大膳（4回）、久保芳和（4回）、大道安次郎（4回）、西村孝夫（3回）、小谷義次（2回）、三谷友吉（2回）
第25回～第43回	1948年（昭和23年）	三谷友吉（4回）、入江奨（3回）、久保芳和（2回）、西村孝夫（2回）
第44回～第63回	1949年（昭和24年）	川村大膳（2回）、松田勇（2回）、余田博通（2回）
第64回～第83回	1950年（昭和25年）	川村大膳（2回）、久保芳和（2回）、福原行三（2回）、安田信一（2回）、山崎時彦（2回）
第84回～第98回	1951年（昭和26年）	大前朝郎（2回）、佐藤明（2回）、豊倉三子雄（2回）
第99回～第118回	1952年（昭和27年）	大前朝郎（3回）、久保芳和（3回）、内多毅（2回）、佐藤明（2回）、安田信一（2回）、山崎時彦（2回）
第119回～第134回	1953年（昭和28年）	豊倉三子雄（2回）、安田信一（2回）
第135回～第148回	1954年（昭和29年）	川村大膳（2回）、久保芳和（2回）、安田信一（2回）
第149回～第168回	1955年（昭和30年）	大前朝郎（3回）、天川潤次郎（2回）、久保芳和（2回）、佐藤明（2回）、田中敏弘（2回）、行沢健三（2回）
第169回～第182回	1956年（昭和31年）	久保芳和（3回）、田中敏弘（2回）
第183回～第191回	1957年（昭和32年）	なし
第192回～第200回	1958年（昭和33年）	川村大膳（2回）
第201回～第208回	1959年（昭和34年）	なし
第209回～第216回	1960年（昭和35年）	なし
第217回～第224回	1961年（昭和36年）	なし
第225回～第233回	1962年（昭和37年）	なし
第234回～第241回	1963年（昭和38年）	なし
第242回～第250回	1964年（昭和39年）	なし
第251回～第258回	1965年（昭和40年）	金田良治（2回）

第 259 回～第 264 回	1966 年 (昭和 41 年)	6	なし
第 265 回～第 272 回	1967 年 (昭和 42 年)	8	なし
第 273 回～第 280 回	1968 年 (昭和 43 年)	8	なし
第 281 回～第 288 回	1969 年 (昭和 44 年)	8	なし
第 289 回～第 297 回	1970 年 (昭和 45 年)	9	なし
第 298 回～第 306 回	1971 年 (昭和 46 年)	9	なし
第 307 回～第 315 回	1972 年 (昭和 47 年)	9	なし
第 316 回～第 326 回	1973 年 (昭和 48 年)	11	大前朗郎 (2 回)
第 327 回～第 336 回	1974 年 (昭和 49 年)	10	なし
第 337 回～第 347 回	1975 年 (昭和 50 年)	11	なし
第 348 回～第 358 回	1976 年 (昭和 51 年)	11	なし
第 359 回～第 369 回	1977 年 (昭和 52 年)	11	なし
第 370 回～第 380 回	1978 年 (昭和 53 年)	11	なし
第 381 回～第 390 回	1979 年 (昭和 54 年)	10	なし
第 391 回～第 401 回	1980 年 (昭和 55 年)	11	なし
第 402 回～第 403 回	1981 年 (昭和 56 年)	2	なし

合 計 403 回

- 第 1 回 (1946 年 7 月 27 日) ～第 319 回 (1973 年 5 月 27 日) については、記念事業委員会編 (1973)、747-767 頁参照。これについては田中 (2010) に書き写されているが、1947 年 (昭和 27 年) 2 月 23 日の日付が書き落とされている (田中 (2010) 10 頁；記念事業委員会編 (1973) 747 頁参照)。なお、表には 1948 年 (昭和 23 年) [9 月 26 日、10 月 15 日、11 月 14 日] については記録なし (田中 (2010) 11 頁；記念事業委員会編 (1973) 749 頁) の 3 つは含めていない。また 1967 年 (昭和 42 年) ～ 1969 年 (昭和 44 年) の「四国学院大学に於ける研究会」(田中 (2010)、24-25 頁；記念事業委員会編 (1973) 767-768 頁参照) も含めていない。
- 第 320 回 (1973 年 7 月 1 日) ～第 403 回 (1981 年 3 月 22 日) については、張光夫・篠原久の記録ノート (篠原氏所持) による。これについては一部が田中 (2011) 146-148 頁に書き写されている。

表 2：経済学史研究会の第 201 回例会から第 250 回例会まで（2010 年 3 月～2019 年 12 月）の記録

回（年月）	報告者	論題	討論者
第 201 回（2010.3.13）	林 直樹 （京都大・院生）	デフォォーと合邦のレトリック——1707 年合邦と「見えざる手」	——
第 202 回（2010.4.17）	竹本 洋 （関西学院大）	内田・小林論争とは何であったのか、いまだ何であるのか	——
第 203 回（2010.6.26）	南森 茂太 （関西学院大・研究員）	神田孝平の政治体制論と兵庫県政——「會議」と「行政」の分離、および国と地方の議会の関係について	——
第 204 回 （合宿 2010.8.19-20）	野原 慎司 （京都大・院生）	18 世紀中葉における文明社会史観の諸相——チュルゴ、ミラボー、スミス	——
	松本 哲人 （兵庫学院大・院生）	スミスとブリーストリー——奴隷制批判と人間観	——
	本郷 亮 （弘前学院大）	ビグー「非自発的遊休の問題」（1910 年）について——厚生経済学体系の根幹	——
第 205 回（2010.11.13）	北田 了介 （関西学院大・研究員）	「パレーシア」をめぐるフーコー晩年の問い——生存の美学の系譜	——
第 206 回（2010.12.11）	原田 哲史 （関西学院大）	ヴェルナー・ゾムバルトにおける経済システムと発展	——
第 207 回（2011.3.26）	岸野 浩一 （関西学院大・院生）	合評会：森直人『ヒュームにおける正義と統治——文明社会の両義性』創文社、2010 年	——
第 208 回（2011.4.23）	門 亜樹子 （京都大・非常勤）	バルベラックにおける道徳と娛樂	——
第 209 回（2011.5.28）	松山 直樹 （北海道大）	A. マーシャルにおける経済進歩の源泉——アメリカの産業状態に関する考察をめぐって	——
第 210 回（2011.6.18）	佐々木 亘 （鹿児島純心女子短期大）	自然法と共同善——トマス・アクィナスにおけるベルソナと共同体	——

第 211 回 (合宿 2011.8.18-19)	南森 茂太 (関西学院大・研究員)	神田孝平の経済思想——日本経済思想史のなかでの位置づけ	——
	本郷 亮 (弘前学院大)	ケインズ『一般理論』に対するビグーの書評論文 (1936 年)——邦訳と再考	——
	新村 聡 (岡山大)	プラトンとアリストテレスの平等論——『経済生活の秩序』における「文化領域」としての経済	——
第 212 回 (2011.12.17)	大塚 雄太 (名古屋大)	「通俗哲学」としての道徳哲学——ガルヴェにおける理論と実践	——
第 213 回 (2012.3.10)	太田 仁樹 (岡山大)	民族政策をめぐるカール・レンナーとオットー・バウアー	——
第 214 回 (2012.4.14)	中野 力 (関西学院大・研究員)	ロバート・ウォーレスの宗教論——初期穏健派としてのウォーレス	——
第 215 回 (2012.6.16)	門 亜樹子 (京都大・非常勤)	バルバラックとティロットシン——自己評価と宗教思想	——
第 216 回 (合宿 2012.8.17-18)	久松 太郎 (神戸大)	マルサス『人口論』初版における人口動学とアダム・スミス批判	——
	篠原 久 (関西学院大)	アダム・スミスの『法学講義 1762～1763』(LJA) をめぐって	——
	佐々木 亘 (鹿児島純心女子短期大)	政治哲学と自然法——トマス・アクィナスの自然法論に関する歴史的位置づけの試み	——
第 217 回 (2012.10.20)	森岡 邦泰 (大阪商業大)	ブーフエンドルフのフランス啓蒙思想への影響	——
第 218 回 (2012.12.22)	渡辺 邦博 (奈良産業大)	台北高等商業学校の商業教育について	——
	池尾 愛子 (早稲田大)	天野為之と二宮尊徳の教義——推諫、仕法、そして経済教育	——

第 219 回 (2013.3.9)	篠原 久 (関西学院大)	アダム・スミスにおける学問と思想 —— グラウスゴウ大学「特別講義」の展開	——
	竹本 洋 (関西学院大)		
第 220 回 (2013.4.27)	服部 茂幸 (福井県立大)	金融危機と経済学	本郷 亮 (関西学院大)
第 221 回 (2013.6.29)	大津 康作 (甲南大)	現代に甦るランゲの思想	大田 一廣 (阪南大)
第 222 回 (2013.10.5)	渡辺 恵一 (京都学園大)	スミス博士の死去 —— 18 世紀イングランドの新聞・雑誌より	古家 弘幸 (徳島文理大)
	久保 真 (関西学院大)	19 世紀中葉ケンブリッジにおいて、リカードウはいかに語られたか	井上 琢智 (関西学院大)
第 223 回 (2013.12.7)	中野 力 (関西学院大・研究員)	「マルサス = ゴドウィン人口論争」の一側面 —— マルサスのゴドウィン宛書簡 (1798 年 8 月 20 日) を中心に 贈与の射程 —— モースとグレイバー	生越 利昭 (兵庫県立大・名誉)
	若森 みどり (大阪市立大)		太田 仁樹 (岡山大)
第 224 回 (2014.3.1)	クリストファー・ J・ペリー (グラスゴウ大)	Adam Smith: Opulence, Freedom and the Virtues of a Modern Economy	篠原 久 (関西学院大・名誉)
第 225 回 (2014.4.26)	喜多 洋 (大阪産業大)	スミス学説のフランス語世界への浸透	壽里 竜 (関西大)
	植村 邦彦 (関西大)	ファーガソン、スミス、ヘーゲル —— ドイツにおける〈市民社会〉概念	原田 哲史 (関西学院大)
第 226 回 (2014.7.5)	武井 敬亮 (京都大・ジュニア リサーチャー)	合評会：林直樹『デフォォーとイングランド啓蒙』京都大学学術出版会、2012 年 日本の経済論の転換期としての明治 8 年 —— 神田孝平の著作目録から見えてく るもの	リブライアー：林 直樹 (尾道市立大)
	甲田 太郎 (京都大・院生)		
	南森 茂太 (関西学院大・研究員)		
			牧野 邦昭 (摂南大)

第 227 回 (2014.10.4)	三好 宏治 (神戸学院大・非常勤) 八木 紀一郎 (摂南大) 門 亜樹子 (京都大・ジュニア リサーチャー) 石井 知章 (明治大)	合評会：水田洋・篠原久・只越親和・前田俊文訳、A. スミス「法学講義 1762 ～1763」名古屋大学出版会、2012 年 20 世紀におけるマルクスの不幸な制度化——MEGA をめぐって ジャン・バルベラック研究——自然法学とキリスト教的人間像 現代中国におけるリベラル vs 新左派および毛沢東主義 経済学史研究会を振り返って	リブライアー：篠原 久 (関西学院大・名誉) 太田 仁樹 (岡山大) 森岡 邦泰 (大阪商業大) 久保 真 (関西学院大) 篠原 久 (関西学院大・名誉)
第 228 回 (2014.12.6)	渡辺 邦博 (奈良学園大) 井上 瑛智 (関西学院大)	関西学院大学図書館と特別文庫——堀文庫から H.S. フォックスウェル文書へ	松山 直樹 (兵庫県立大)
第 229 回 (2015.3.7)	石田 教子 (日本大) 竹本 洋 (関西学院大・名誉)	ヴェブレンの経済学「再建」構想——文化人類学の経済学的応用の含意 相互性と等価性の原則——「改変アダム・スミス問題」	上宮 智之 (大阪経済大) 大黒 弘慈 (京都大)
230 回 (2015.4.25)	山田 園子 (広島大) 若松 直幸 (神戸大・院生)	ホッブズの「戦史」	竹澤 祐丈 (京都大)
第 231 回 (2015.7.4)	大塚 雄太 (名古屋経済大)	リカード機械論における「革命的变化」再考 ユストゥス・メーザーにおける理論と実践	石井 穰 (関東学院大) 鈴木 直志 (中央大)
第 232 回 (2015.10.3)	ベルトラム・ シェフォールト (フランクフルト大)	Die ältere deutsche Gebrauchswertlehre, ihr Bezug zur Warenkunde und ihre mögliche heutige Bedeutung (かつてのドイツ的使用価値論——その商品学と の関連、およびその今日の意義の可能性)	恒木 健太郎 (専修大)

第 233 回 (2015.12.5)	西 淳 (三重大・非常勤)	合評会：牧野邦昭『柴田敬——資本主義の超克を目指して』日本経済評論社、2015 年	リブライアー：牧野 邦昭 (摂南大)
	八木 紀一郎 (摂南大)	参照基準（経済学）をめぐる論争で私が考えたこと——今日における"Economics"と"Political Economy"	本郷 亮 (関西学院大)
第 234 回 (2016.3.5)	竹本 洋 (関西学院大・名誉)	合評会：平山健二郎『貨幣と金融政策——貨幣数量説の歴史的検証』東洋経済新報社、2015 年	リブライアー：平山 健二郎 (関西学院大)
	太田 仁樹 (岡山大)	自著を語る：太田仁樹『論戦 マルクス主義理論史研究』	若森 みどり (大阪市立大)
第 235 回 (2016.4.23)	野原 慎司 (東京大)	Montesquieu, Hume, and Smith on the Theory of Money	篠原 久 (関西学院大・名誉)
	ジルベール・ ファッカレロー (パリ大学第 2)	Condorcet, "Social Mathematic" and Social Science	隠岐 さや香 (名古屋大)
第 236 回 (2016.7.2)	森 直人 (高知大)	ヒューム勢力均衡論の再検討——『イングラント史』での叙述を中心に	伊藤 誠一郎 (大月短大)
	中野 力 (啓明学院高校)	ウォーレスとマルサスの人口論——ヘイズリットのマルサス批判を用いて	永井 義雄 (名古屋大・名)
第 237 回 (2016.10.1)	本郷 亮 (関西学院大)	ビグー財政論の展開と意義——『財政学』第 3 版 (1947) の邦訳を終えて	山崎 聡 (高知大)
	佐藤 方宣 (関西大)	ロールズとナイト	太子堂 正称 (東洋大)
第 238 回 (2016.12.3)	門 亜樹子 (京都大・ジュニア リサーチャー)	ジョン・デイロットスンのキリスト教的人間像（感覚・理性・信仰）——ジャン・バルベラックの思想との関連性をめぐって	生越 利昭 (兵庫県立大・名誉)
	川名 雄一郎 (早稲田大・高等研究所)	19 世紀前半のイギリスにおける決定論的性格形成論	松井 名津 (松山大)

第 239 回 (2017.3.4)	松本 有一 (関西学院大)	イタリア時代のスラフファ——生い立ちと研究者への道	宮本 順介 (松山大)
	渡辺 恵一 (京都学園大)	近代世界における銀市場とアダム・スミス	渡辺 邦博 (奈良学園大)
第 240 回 (2017.4.29)	間嶋 豊弘 (早稲田大・院生)	均衡概念をめぐる J.J. ベッヒャーと J. スチュアートとの比較分析	原田 哲史 (関西学院大)
	若松 直幸 (神戸大・院生)	デイヴィッド・リカードウの「課税の原理」——理論と実際	堂目 卓生 (大阪大)
第 241 回 (2017.7.1)	山口 拓美 (神奈川大)	マルクスの類的存在概念について	植村 邦彦 (関西大)
	黒滝 正昭 (宮城学院女子大・名誉)	合評会：橋本直樹『共産党宣言』普及史序説』八潮社、2016 年	リブライアー：橋本 直樹 (鹿児島大)
第 242 回 (2017.10.7)	甲田 太郎 (京都大・院生)	マンデヴィルとキリスト教知識普及協会、風紀改良協会、シャフツベリの応答 関係	生越 利昭 (兵庫県立大・名誉)
	竹永 進 (大東文化大)	1860 年代前半のマルクスの地代論研究——61-63 年草稿、『資本論』第三部主 要原稿第 6 章 (65 年) および関連抜粋ノート (リービッヒの農業化学) を中心に	佐々木 隆治 (立教大学)
第 243 回 (2017.12.2)	村井 明彦 (関西大・非常勤)	経済人はあまり利己的でないことについて	佐藤 方宣 (関西大)
	山田 鏡夫 (名古屋大・名誉)	合評会：八木紀一郎『国境を越える市民社会 地域に根ざす市民社会——現代 政治経済学論集』校井書店、2017 年	リブライアー：八木 紀一郎 (摂南大)
第 244 回 (2018.4.28)	青柳 淳子 (大東文化大・ 高崎経済大・非常勤)	海保青陵の経済思想と加賀藩	南森 茂太 (長崎大)
	太子堂 正称 (東洋大)	反「新自由主義」としてのハイエク自由主義	吉野 裕介 (中京大)
(2018.7.7)	大雨のため中止		

第 245 回 (2018.10.6)	古谷 豊 (東北大)	ステアアートとダヴナント——戦費調達と財政論	三好 宏治 (神戸学院大・非常勤)
	柳田 芳伸 (長崎県立大)	合評会：中野力『人口論とユートピア——マルサスの先駆者ロバート・ウォーレス』昭和堂、2016 年	
第 246 回 (2018.12.1)	野原 徳司 (東京大)	合評会：門重樹子訳、J. バルベラック『道徳哲学史』京都大学学術出版会、2017 年	リブライアー：中野 力 (啓明学院中学・高等学校)
	網谷 壮介 (立教大)	合評会：門重樹子訳、J. バルベラック『道徳哲学史』京都大学学術出版会、2017 年	
第 247 回 (2019.4.27)	西岡 韓雄 (同志社大)	合評会：網谷壮介『共和制の理念——イマヌエルカントと 18 世紀末プロイセンの「理論と実践」論争』法政大学出版局、2018 年	リブライアー：門 亜樹子 (京都大・ジュニアリサーチャー)
	影浦 順子 (中部大)	合評会：八木紀一郎・柳田芳伸編『埋もれし近代日本の経済学者たち』昭和堂、2018 年	
第 248 回 (2019.7.6)	牧野 邦昭 (摂南大)	高橋亀吉の経済思想	リブライアー：柳田 芳伸 (長崎県立大)
	小淵 聡 (名古屋大)	荒木光太郎の経済研究と活動	
第 249 回 (2019.10.5)	小峯 寛 (龍谷大)	名古屋大学「荒木光太郎文書」の由来と概要	中村 宗悦 (大東文化大)
	佐武 弘章 (福井県立大・名誉)	ケインズ革命とは何か——マージナルからケインズへ	
第 250 回 (2019.12.7)	佐藤 空 (東洋大)	「資本関係の解体の物質的諸条件」と『資本論』の 2 つのストーリー	大槻 忠史 (群馬大・非常勤)
	竹本 洋 (関西学院大・名誉)	啓蒙期ブリテンの歴史叙述と懐疑主義——初期バークの思想的背景を中心に	
第 250 回 (2019.12.7)	ペルトラム・シェフウォールト (フランクフルト大)	テクストと読解——「歴史器官」としての経済学史・社会思想史	伊藤 宣広 (高崎経済大)
		The Significance of Economic Knowledge for Development in History	
第 250 回 (2019.12.7)			八木 紀一郎 (摂南大)
第 250 回 (2019.12.7)			貫 龍太 (京都大・院生)
第 250 回 (2019.12.7)			竹澤 祐太 (京都大)
第 250 回 (2019.12.7)			中井 大介 (近畿大)

— 討論者の設定は第 220 回からである。

参考文献

- 田中敏弘 (1991) : 『堀経夫博士とその経済学史研究』 玄文社。
- (2010) : 「経済学史研究会の回顧と展望——第 200 回例会を記念して」、
関西学院大学『経済学論究』第 64 巻第 2 号。
- (2011) : 「経済学史研究会記録補遺」、関西学院大学『経済学論究』第 65
巻第 1 号。
- 堀経夫編 (1951) : 『経済思想史辞典』 創元社。
- 堀経夫博士喜寿記念事業委員会編 (1973) : 『経済学の研究と教育の五十年』 世界保
健通信社。なお「記念事業委員会編 (1973)」と略す。

付記

本稿の作成にあたり、資料に関して篠原久先生、南森茂太氏、山本由起子氏
にお世話になりました。記してお礼申し上げます。

この記念例会のあと、2020 年 3 月 12 日に田中敏弘先生が亡くなられまし
た (享年 90 歳)。250 回めの例会を内外の著名な研究者を報告者として呼び
びして大きめの記念例会として開催することについては、最初に田中先生が提案
され、世話人の原田に託されました。筆者は、その記念例会に体調不良でご欠
席された田中先生がさらにご逝去へと至られたことに、愕然としました。ここ
に深い哀悼の意を表させていただきます。